劇団あおきりみかん　其の参拾七

『つぐない』

作・鹿目由紀

【登場人物】

女

男

美和

咲菜

貴大

聡香

飛影

美咲子

神父

先生

他

※他についてはキャストが役を兼ねる

女　気が付くと、わたしは見知らぬ教会に来ていた。教会ならわたしの長年の問いに答えてくれる気がした。わたしはカトリックでもプロテスタントでもないが、教会が持つ聖なる力が今のわたしには必要だと思った。祭壇の前に立つと、心にすーっと爽やかな風が吹き抜けるような気がした。ここなら絶対にわたしの問いに答えてくれる。だって神父さまは、神の使いなのだ。けれど、わたしの前に現れたのは神父さまではなく、ストライプのシャツを着た３０代半ばくらいの男性だった。彼もここに祈りに来たのだろう、そう思った。彼が祭壇に近づいてきたので、わたしは去ろうとした。すれ違った。すると彼から昔嗅いだことのある香りがふわっと漂った。

それで決意した。彼に聞いてもらおうと。

彼は祭壇に祈りを捧げると、しばらく十字架を見つめていた。その後ろ姿に、わたしは話しかけた。

女　あの。
男　はい。
女　ちょっとだけ、話を聞いていただけませんか。
男　え、僕ですか。
女　ええ。
男　僕は神父ではないですよ。
女　そうでしょうね。
男　悩みなら、告解室で神父さまに聞いていただく方がいいと思います。
女　分かります。でもわたしの話は懺悔ではないんです。
男　僕はただここに祈りに来ただけですよ。
女　はい。そんなあなたにこそ聞いていただきたいんです。
男　…僕、この後用事があって。
女　ちょっとの間だけでいいんです。
男　…。
女　お願いします。
男　……じゃ、本当にちょっとだけ。

彼はそう言うと一番前のベンチに横向きに座った。わたしは通路をはさんだベンチに彼と向かい合う形で座った。やはり教会に来て良かったと思った。そして彼を選んだのは正解だと話す前から確信していた。カウンセラーの分析でもなく病院の検査でもなく、ただ見知らぬ人に自分のことを聞いてもらう。それが問いに

対する近道だと感じたのだ。先生が言うようにつぐないをしなければいけないのなら、彼に聞いてもらってからでも遅くはない。この人に賭けよう。

男　どうぞ。
女　あなたには、罪悪感ってありますか。
男　罪悪感ですか。
女　はい。
男　人に対して悪いなと思う、あの？
女　はい。
男　そりゃありますよ。
女　わたしには無いんです。
男　罪悪感がですか。
女　はい。これっぽっちも。
男　そんなことないでしょう。
女　無いんです。本当に。
男　どうしてそう思うんですか。
女　約束をすっぽかしたり遅刻したり、そういうことしても、全然悪いと思わないんです。
男　そういう方は他にもいますよね。あんまり悪びれないと腹立ちますけど。
女　それだけじゃなくて、例えば不倫です。
男　不倫。
女　１４歳年上の男性と６年不倫していましたが、ちっとも悪いと思いません。
男　相手の奥さんにも。
女　悪いと思いませんでした。不倫を世間に隠していたのは相手に言わないでくれと泣いて頼まれたからです。わたしは別に言っても構いませんでした。
男　そうなんですか。
女　ですが不倫に対する一般的な考えを知り、わたしに罪悪感がないのはおかしいと、ある方に聞いたんです。
男　ある方。
女　わたしの妹が大変お世話になっている先生です。彼に聞いたらあなたが悪いと思わないのは大きな罪だと言われました。
男　罪悪感がないのが。
女　はい。大きな罪だからつぐないなさい。そう言われました。
男　つぐなうとは、どのように。
女　やり方は色々あると先生はおっしゃっていました。ただわたしは、つぐなう前に、本当に先生の言う通りなのか確かめようと思ったんです。先生の言葉をそのま

ますんなり受け入れるのは、抵抗があったので。

男　そうですか。

女　罪悪感が無いのは罪なのでしょうか。

男　…いつから無いんですか。

女　無いと気づいたのは、小学5年生の時です。授業で、今まで生きてきて悪いと思っていること、後悔していることを書き出して、懺悔しましょう。という時間がありました。懺悔の紙と書かれた青い紙に悪いと思っていること、後悔していることを書いて、担任の紺野先生に提出するというものです。

紺野先生　みんな提出しましたね。

生徒たち　はーい。

紺野先生　じゃあ、今からどんな後悔があるのかひとつひとつ読み上げますね。

生徒１　えー！読むんですか。

生徒２　聞いてない！

紺野先生　大丈夫です。名前を書いてもらってないので誰のものかは絶対に分かりません。

生徒１　それならいいや。

紺野先生　じゃあまずこれ。「お母さんが大切にしているお皿を割ってしまったのに、それを正直に言っていません」これは悪いですね。誰かは分かりませんけど、ちゃんと言いましょうね。

生徒１　はい！あ。

紺野先生　あら黒川くん、自分で白状しちゃった。

生徒１　いけね。

笑いに包まれる教室。

紺野先生　次はこれ。「彼氏がいるのに、別の男子とデートに行きました」これは悪いなぁ。ダメだよ。こういうことは大人になってからもクセになっちゃうからね。はい、次は「弟のどら焼きをこっそり食べたのに、お父さんのせいにしました」お父さん可哀想だから、ちゃんと正直に謝りなさいね。ええと次は…「ありません」。…ありませんってことはないよね？誰だろうこれ。

生徒２　無いって言ってるんだから無いんじゃないの？

紺野先生　違うの。先生はね、無いことが問題じゃないと思うの。無いことより問題なのは、見つけようという努力をしないことなの。これ誰かな。

静寂。

紺野先生　誰これ。正直に手挙げて！

静寂。

女　先生はそのあと筆跡からわたしを特定し、職員室に呼び出しました。

紺野先生　白井さん。これあなたね。

美和　はい。

紺野先生　どうしてこんなこと書いたの。

美和　本当に無いんです。

紺野先生　言ったでしょう。大事なのは、ぱっと思いつかなかったとしても、よーく考えて見つけ出して書くことなの。分かるでしょ。

美和　凄くよく考えました。でも悪いと思ったことはないんです。

紺野先生　じゃあこれ。これが悪いことです。

美和　これですか。

紺野先生　そう思わないの？この状況、凄く悪いことだよ。

美和　「ありません」と書いたことがですか。

紺野先生　そうでしょ。そのせいで授業は台無しになったし、先生はあなたにがっかりしちゃったのよ。きちんと謝りなさい。

美和　あの…悪いと思ってなくても謝るものなんですか。

紺野先生　いいえ、悪いと思って謝りなさい。

美和　悪いと思えないので、謝れません。

紺野先生　悪いと思いなさい。

美和　わたし、悪いと思わないんです。

紺野先生　思いなさい！

美和　…。

紺野先生　じゃあ悪いと思えるように、あなたのお母さんに来てもらいましょう。

女　それで学校に母が呼ばれました。

紺野先生　お母さん、美和ちゃんはご家庭でなにか問題があるんじゃないですか。

美咲子　いえいえ、問題はないです。

紺野先生　だってここまで迷惑をかけておいて悪いと思わないって言うんですよ。今までなにかを悪いと思ったことは一度もないって。

美咲子　すみません。この子強がってるだけだと思うんです。この子、たまにそういうこと言いますけど、本当は罪悪感に押しつぶされそうになっているのを、素直に表

現できないんですよ。そういう内気な性格の子なんです。

紺野先生　…まあ、確かに美和さんは活発なタイプではないとは思いますけど。

美咲子　すみません。もう少し素直になれるように努力しますから。

紺野先生　お母さん、色々あるのはお聞きしてますのでお忙しいとは思いますけど、きちんと接してあげてくださいね。

美咲子　すみませんでした。ほら先生に謝りなさい。

美和　だけど悪いと思ってないからさ。

女　すると母は耳元でこうささやきました。

美咲子　カタチだけでいいから。

美和　…え。

美咲子　…。

美和　…ごめんなさい。

紺野先生　まぁ、分かってくれればいいんですよ。よかった。美和ちゃん少しは分かってくれたみたいで。

女　それからわたしはカタチだけの「ごめんなさい」でも人は笑顔になってくれるんだと理解しました。帰り道、母が言いました。

美咲子　恥をかかせるのはやめて。

美和　恥？

美咲子　あんたがわたしをよく思ってないのは知ってる。あんたには悪いことしたと思ってる。だけどあんな風に恥をかかせて復讐することないでしょ。今日だって大事な仕事をわざわざ途中で抜け出してきたんだよ。あんた、お母さんがどんなに忙しいか知ってるでしょ。稼いだお金でお母さんの好きなもの買ってるんじゃないんだよ。あんたの学費とか生活費とか払うためにせっせと働いてるの。だからこんなやり方で復讐しないでよ。なに、わたしが悪いの？わたしが全部。

美和　…ごめんなさい。

女　わたしはまた、カタチだけの「ごめんなさい」を口にしました。

美咲子　今日は夜も仕事だから、なんかとって食べといて。

美和　…うん。

女　母はわたしの手を引っ張ってどんどん進んでいきました。わたしは、悪いと思わ

なくてもこれからは「ごめんなさい」と言おうと心に決めました。
男　一度も悪いと思ったことはないんですか。
女　ええ。だからわたしの行動はいつも犯罪と隣り合わせです。
男　犯罪と。
女　自分では犯罪だと思ってないことが犯罪である可能性があるからです。

女　彼はわたしの話に興味を持ち始めた。時間のことを忘れたい様子で、それまで気にしていた腕時計を外した。わたしは生まれて初めて楽しく自分の話をしている。今、わたしにこの話をさせているのは、わたしがつぐなうべきだと言った、あの先生の言葉だ。つぐないを正確に理解するために、わたしはわたしを理解しなければならないのだ。

女　お名前は…
男　水島です。
女　水島さんは法を犯したことがありますか。
男　ありません。
女　じゃあ信号を無視したことは。
男　…あります。
女　自転車を停めてはいけない所に停めたことは。
男　…あります。
女　自動車を停めてはいけない所に
男　あります。
女　そうなんですよ。みんなこれくらいはやっているものです。でも、これより大きな罪のハードルは高い。そうですよね。
男　まあ、そうですね。
女　高校2年生の時、つき合っていた彼にスーパーで万引きしようとしているのを見つかりました。

貴大　なにしてんの。
美和　え。
貴大　今、そこに入れたでしょ。
美和　あ、うん。内緒ね。
貴大　内緒ね、じゃないよ。そんなの見逃せない。
美和　どうして。
貴大　どうしてって、美和のやってるそれは、万引きだよ。
美和　そうだよ。でも見つからなければ大丈夫でしょ。

貴大　そういう問題じゃないだろ。ほら出せよ。

美和、カバンから化粧水と乳液を出す。

貴大　他には。
美和　口紅とアイライナー。
貴大　出せよ。

美和、カバンから口紅とアイライナーを出す。

貴大　…外に出よう。

貴大、美和の手を引っ張って外に出る。

女　貴大はわたしの手をぐいぐい引っ張って、近くの公園まで連れていきました。８月の夜の公園は、まだもわっとしていて気持ち悪い空気に包まれていました。ちょっと離れたベンチでカップルが、ほどけなくなったネックレスのチェーンのダマみたいに絡み合っていたのを覚えています。

貴大　で、どうしてあんなことしたの。
美和　欲しかったから。
貴大　…違うだろう。それだけじゃないだろう。
美和　ううん、それだけなの。欲しかったの。
貴大　どうして欲しかったの。
美和　もうすぐ貴大の誕生日でしょ。おしゃれしたくて。
貴大　俺のせいにするのやめろよ。
美和　違うの。本当にそうなの。
貴大　俺、お前の他のヤツらと違うとこ可愛いと思ってた。約束すっぽかしても遅刻しても学校無断で休んでも、それはお前が他のヤツらと違って人付き合い苦手で不器用だからだと思ってた。俺ぐいぐい来るヤツ得意じゃないから美和みたいな子って本当にいいなぁって。だけど、こんなに常識のないヤツだったなんて。信号を無視したことあるでしょ。
美和　そりゃあるよ。
貴大　自転車を停めちゃいけない所に停めたことあるでしょ。
美和　あるけど
貴大　それとおんなじだよ。万引きも。

貴大　万引きは違う。明らかに悪い。
美和　少しでも駅の近くに停めたいから自転車を停めちゃいけない所に停めるのと、貴大に少しでもおしゃれしたわたしを見て貰いたいから化粧品万引きするのと、同じことだよね。
貴大　罪の重さが違うだろ。
美和　罪の重さっていうのは、刑期のこと？
貴大　それだけじゃない。罪悪感だって違うだろう？
美和　わたし罪悪感ないの。
貴大　は？
美和　わたし、少しも悪いと思わないの。
貴大　そんなことないだろう！そんなウソつくなよ、みっともない！
美和　…ごめんなさい。

女　こうして、わたしはまたカタチの決まった「ごめんなさい」を貴大に言いました。それ以来、貴大とは全然会わなくなりました。その日が事実上の別れだったんでしょうね。
男　会わなくなる原因を作って貴大くんに悪いとは思わなかったんですか。
女　ちっとも思いませんでした。
男　わたしね、万引きしたことあるんですよ。
女　そうなんですか。
男　そうなんです。いや、あなたみたいに意図的じゃなくてね、なんていうか、あれは無意識にやってしまったんです。駄菓子屋で色々選んでて、あ、家に早く帰んなきゃって思い出したら、知らない間に、駄菓子屋からだいぶ外に出ていたんですよ。
女　どうしたんですか。
男　返そうと思ったんだけど、もう一度店に入るのが怖くてね、それにちゃんと説明出来る自信もなくて…そのまま持ち帰りました。
女　そうですか。
男　フィリックスガムとマルカワのオレンジガム、「5円があるよ」っていう5円玉のカタチしたチョコとコーラ味のラムネ。今でも忘れませんね、あの時の罪悪感。母とあの駄菓子屋に行く度に、心がチクチク痛みました。
女　羨ましいです。
男　え？
女　わたしには一生得られない感覚です。
男　僕はあなたの感覚を知りたいけどな。

女　彼は前のめりになり、シャツのボタンをひとつ外した。どうやらこの話に熱中しすぎて、体が熱くなっているようだ。しかしわたしはそれと関係なく、先生から言われたことを思い出していた。

先生　なあ、君は人を殺してもなんとも思わないんだよね。それは社会にとって大きな罪だ。世の中は罪悪感で成り立っているのだよ。罪悪感が犯罪の歯止めになっている。抑止力になっているんだ。それなのに、君にはその罪の回避システムとしての罪悪感がこれっぽっちもないんだ。そして君はおそらくこれまでの３３年間の中で、無自覚に人を傷つけ、社会の害悪になってきたんだと思うよ。それをつぐなわなくて、なにをつぐなうって言うんだい。

女　でも先生は、具体的なつぐないの方法は教えてくれなかった。先生はたぶん、妹のことが気がかりで仕方なかったのだ。

男　白井さん。

女　あ、はい。

男　白井さんには他にも色々そういうことがあるんでしょうね。

女　そういえば半年前の１月のことを思い出しました。

男　どういうことですか。

女　わたし、妹の彼氏とセックスしたんです。

男　は？

女　でもちっとも悪いと思わないんです。

男　え、あの、それ本当ですか。

女　本当です。ホテルに行ったんです。休憩３時間で２５００円の所です。

男　ずいぶん安いな。

女　でも彼はお金がないと言っていたので、わたしが払いました。

男　どうしてまた彼と。

女　妹が彼と別れやすいかと思って。

男　どういうことですか。

女　どういうきっかけでつき合い出したのか知りません。妹の彼はホストで、色々と不安定な感じでした。わたしは、妹は彼のことで悩んでいると思いました。だから妹が別れやすいようにきっかけを作ってあげるべきだと思いました。それで、

男　それで、その、

女　セックスしました。

飛影　ごめん。

美和　え？
飛影　（服を着ながら）知らなかったからさ。お姉さんだったんなんて。
美和　（服を着ながら）ああ。悪いことだと思ってないから。
飛影　え、そうなの？
美和　うん。あ、こっちにあるよ。（靴下を投げる）
飛影　（受け取る）でも俺、妹さんと付き合ってるし。
美和　妹にとっていいことだから。これ。
飛影　え、なんで。あ、これ。（ストッキングを渡す）
美和　（受け取る）それはあなたに詳しく話すとややこしいからいいや。
飛影　ごめん。
美和　それ面白いね。
飛影　面白い？
美和　それ何かを悪いと思ってるんだよね。
飛影　そりゃ悪いだろう。
美和　何が悪いの？
飛影　だって俺、妹さんと付き合ってるんだよ。
美和　それなのにその姉と寝たことに対する罪悪感なんだ。
飛影　そりゃそうでしょ。
美和　ねえ、その罪悪感っていつ頃生まれるの？
飛影　いつって…ここに入る前からずっと心にあるよ。
美和　へえ。罪悪感があるのにこういうことするんだ。
飛影　罪悪感に欲望が勝つというか…。
美和　羨ましいな。
飛影　羨ましい？
美和　そういう心のせめぎ合い。楽しそう。
飛影　なんかごめん。
美和　なんで謝るの。
飛影　だって俺のこと責めてるじゃん。
美和　どうして？全然責めてないよ。
飛影　もうごめんって。だけどあんたも同罪だからさ。（去る）
美和　あ、ちょっと。

女　彼はそそくさと出ていきました。ふと床を見ると、彼のもう片方の靴下までもが「ごめん」という感じで申し訳なさそうに丸まっていました。わたしはただ彼の感覚が知りたかったんです。だけど彼は、それを責められてると感じたようでした。だけどわたしは本当に純粋な気持ちで、わたしには無い感覚を知りたかった

んです。
男　白井さんには本当に罪悪感が無いんですねぇ。
女　疑ってました？
男　疑うっていうか、そんな人はこの世にいるはずないと思ってましたから。
女　これは罪なのでしょうか。
男　罪か、と言われると難しいですね。そもそもどうして無いのかが気になりますね。もともと無いのか、無くなったのか。
女　それが分からないんです。
男　全然？
女　ええ、全然。

女　わたしはまた、先生の言葉を思い出した。

先生　美和さん、僕はね、妹さんのことが不憫でならない。分かるよね。妹さんは、美和さんの大事な家族だよね。だから分かって貰えると思うんだ。妹さんはあなたのようなお姉さんを持ったことで、小さい頃から苦労してきたんだ。だからわたしはあなたにつぐなって貰いたいと、そう思うんだよ。分かって貰えるよね。妹さんは傷ついてるんだよ。そして妹さんを傷つけたのは、あなただ。

男　つかぬことをお聞きしますが…
女　…なんでしょう。
男　妹さんは、あなたが妹さんの彼氏とその
女　セックスしたことを知っているかですよね。
男　ここ教会ですからあんまりそういう単語は言わない方がいいかと。
女　知ってますよ。わたしが直接言いました。

美和　咲菜。ちょっと聞いて欲しいことがあって。
咲菜　なに。おねえちゃん。
美和　咲菜の彼氏いるじゃん。
咲菜　ああ、飛影くん。
美和　わたし、彼とセックスしたんだ。
咲菜　…は？
美和　昨日ホテル行ってさ。
咲菜　は？冗談でしょ。
美和　ホントだよ。これ。（靴下を見せる）昨日、彼が忘れてった。
咲菜　…なんで。

美和　…咲菜のためにだよ。

咲菜、美和の頬を打つ。

咲菜　最低。

咲菜、去っていく。

男　そりゃそうなりますよね。

女　でも妹はわたしのおかげで彼と別れることが出来たんです。

男　でも僕が妹さんなら姉がそんなことしたのを喜ぶとは思えないけどな。

女　そうなんですかね。

男　そうですよ！妹さんとは仲がよかったんですか。

女　妹はいつもわたしに気を遣ってくれました。例えばわたしが小学６年生の時。

美咲子　美和、咲菜、ちょっと来て。

小学生の美和と咲菜が来る。

美咲子　…これやったの誰。

母、切り裂かれたボロボロのシャツを見せる。

美咲子　これ、お父さんが一番気に入ってたシャツだよ。誰。

美和　わたしがやった。

美咲子　なんで。

美和　捨てた方がいいと思って。

美咲子、美和の髪の毛を引っ張る。

美咲子　これはお父さんが一番気に入ってたシャツなんだ。どこも破れてなかったし、捨てる必要なかっただろ。え？

咲菜　お母さんやめてよ。

美和　そのシャツがあると、わたしたちが困ると思って。

美咲子　なんだよ困るって！

美和　だってお母さんそのシャツ見てるとムラムラするって言ってたから。

美咲子　は？
美和　一昨日の夜、お母さんがあの人とソファでくっついてる時。だからあの人がそのシャツ着てない方がわたしたちは安心だなって。子どももこれ以上出来ないし、お母さんがあの人にべったりになることもないでしょ。
美咲子　なに言ってんの。あんたたちのお父さんだよ。
美和　お父さんじゃないよ。血つながってないし。
美咲子　血なんか関係ない。お父さんって呼びなさい。
美和　お父さんじゃないよ。ホントのお父さんは死んじゃったもん。1年前に。
咲菜　ごめんなさい。
美咲子　なんで咲菜が謝るの。
咲菜　そのシャツボロボロにしてやりたいって言ったの、わたしなんだ。
美咲子　え？
咲菜　夜中にしゃべってるの聞いちゃって、それで頭に来て…だからわたしが悪いの。
美咲子　咲菜は悪くない。思っただけなんだから。実際にやったのは美和。美和が悪い。
咲菜　でもわたしがそんなこと言わなきゃお姉ちゃんはやらなかった。
美咲子　咲菜がそんなこと言っても真に受けないでやらない人も沢山いるの。でも本当にやるのは悪質だよ。
咲菜　悪いのはわたしなの。ごめんなさい。ホントごめんなさい。
女　妹は、いつもわたしの代わりに謝ってくれました。
男　いい妹さんなんですね。
女　ええ。いい妹です。
女　彼の中で、妹に対する興味が、わたしに対する興味と同じくらい膨らんだのを感じた。妹はいつも人の心を掴む。わたしも心を掴まれたうちの一人だ。わたしは妹を愛している。目の前の彼には何故かなんでも言えるような気がした。何故だろう。わたしと似ているのだろうか。わたしと似ている人間なんて、そうそういるはずはないのだけれど。とにかく話せるだけ話そう。
女　いい妹だから、あの時手放しで祝福できたんです。
男　あの時。
女　わたしの元彼と付き合うことになった時です。
男　それはいつですか。
女　ホストの彼よりずっと前です。わたしが大学を出て社会人になって数年経ってからですから、わたしが２５歳の頃です。二人が飲み屋から出て来たところに、ばったり出会いました。

貴大　…久しぶり。
美和　久しぶり。
咲菜　あのね、近々言おうとは思ってたんだよ。
貴大　今もその話してたとこで。
咲菜　わたしたちちょっと前から付き合ってるんだ。
貴大　咲菜ちゃんの会社がうちの事務用品取り扱うことになって。コピー用紙とかメモとかボールペンとか。
咲菜　それでしょっちゅう顔合わせてるうちになんとなく。
貴大　お互い意識するようになったっていうか。
咲菜　最初はどこかで会ったことあるなぁくらいにしか思ってなかったんだけど、しゃべってるうちに、ああ、お姉ちゃんの高校の時のってなって。だから意図的なものじゃなくて。
貴大　生半可な気持ちでもなくて、本気で将来も考えて…
咲菜　今その話もしてたとこで。
貴大　そうそう。
美和　二人ともどうしたの。
咲菜　え？
美和　なんかいきなり凄くしゃべるね。
貴大　…ごめん。
美和　え、なんで謝るの。
貴大　だって、ほら…
美和　ほら、なに？
咲菜　あ、そっか。お姉ちゃんこういうの平気なんだっけ。
美和　え、こういうのって？
咲菜　いいやいいや。とにかくわたしたち、ちゃんと付き合うから。
美和　こういうのってどういうの？
咲菜　今度きちんと説明する。罪悪感の話だから。
美和　罪悪感？ああ、二人はもしかしてわたしに罪悪感持ってるってこと？
貴大　またかよ。
咲菜　貴大。
貴大　そうやって人の心をえぐるのやめろよ。
美和　えぐる？
貴大　お前は分かんないんじゃない。分かってるのに知らないふりして俺たちの心をえぐってるんだよ。
美和　分かってるって何を。

貴大　罪悪感だよ。ホントは分かってるんだろ。今俺たちがどういう気持ちかも、あの、高校の時も…

咲菜　貴大、お姉ちゃんは本当に

美和　ごめんなさい。

女　ごめんなさいのカタチは、もうしっかり自分の中に染みついていました。

美和　ごめんなさい。

貴大　…。

咲菜　お姉ちゃんごめんね。わたしたち、きちんと付き合うから。

美和　うん、わたし、二人が幸せになれるよう祈ってる。

咲菜　…ありがとう。

男　それが大学を出てから数年後なんですよね。

女　わたしが２５歳の時です。わたし今３３なんで８年前ですね。

男　で、さっきの飛影さんというホストさんとの出来事は最近のことなんですよね。

女　半年前です。

男　つまり妹さんは、貴大さんとは幸せにはなれなかった。

女　そうなんです。妹は貴大とは上手く行きませんでした。

女　と言いながら、わたしは昨日の先生の言葉を思い出していた。

先生　僕はね、妹さんを救いたいんだ。妹さんは今、絶望の淵にいる。妹さんは未来には希望が持てないと思っている。それを救えるのは、あなたのつぐないなんだ。あなたの心からのつぐないなんだ。分かるよね。だから明後日の金曜日には、立派なつぐないを見せて欲しい。そうして、妹さんが未来への希望を取り戻せるようにして欲しい。もう分かっていると思うが、僕は妹さんが好きだ。仕事柄、そういう個人的な感情はいけないと思っている。だけど僕は、妹さんみたいなタイプの女性が、大好きなんだ。すまない。度が過ぎたね。とにかく僕はあなたのつぐないが見たいんだよ。分かるね。美和さん。明後日は、あなたにかかってるんだよ。

女　一体どういうやり方でつぐなうのがよいのだろうか。

男　白井さん、あなたどうして話を聞いて貰いたかったんですか。

女　明日が大事な日だからです。

男　明日。金曜日。
女　明日の午前までにわたしは、自分の罪悪感が無いことについて理解しなければならないからです。
男　明日なにがあるんですか。
女　裁判です。
男　裁判？
女　妹の裁判があるんです。
男　妹さん、どうされたんですか。
女　人を刺したんです。
男　え…
女　そしてそれはわたしのせいだと、先生はおっしゃいました。
男　先生というのは
女　妹の弁護士です。わたし明日証言するんです。妹の刑が少しでも軽くなるように。
男　あなたのせい、というのは。
女　妹が罪をおかしたのは、わたしの罪悪感が無いせいで、妹が小さい頃から感情に大きな負荷をかけられてきたからだと先生はおっしゃいました。

先生　美和さん頼む。妹さんを救えるのはあなただけなんだよ。
美和　わたしに、どう妹を救えるのでしょうか。
先生　妹さんはね、あなたに罪悪感が無い分だけ、大きな罪悪感にさいなまれてきたんだよ。
美和　どういうことでしょうか。
先生　あなたがなにか悪いことをした時、妹さんはいつも自分が悪いからだと謝ってきた。自分がお姉ちゃんに余計なことを言ったからだ、わたしはお姉ちゃんに罪悪感が無いのをいいことに、お姉ちゃんに悪いことを全て任せている。だからわたしの心はいつもお姉ちゃんへの罪悪感でいっぱいだ。わたしだけ可愛いワンピースを買って貰っても、お姉ちゃんに申し訳なくて袖を通すことが出来ない。
美和　そんなことないです。わたし咲菜のことなんとも思ってませんし。
先生　無言の圧力だよ。
美和　どういうことですか。
先生　あなたにその気が無くても人は勘ぐるんだよ。あなたが本当は怒りに打ち震えているんじゃないか。あなたの何気ない言葉も裏読みされる。本当はいじわるで言ってるんじゃないか。本当はわたしのこと恨んでるんじゃないか。咲菜さんはまさにそれだ。それを小さい頃からずっと感じてきている。
美和　だから人を刺したんですか。
先生　それはまだ分からない。しかし刺した相手が相手だからね。

美和　貴大。

男　ちょっと待ってください！刺されたのは貴大さんなんですか。
女　そうです。
男　でも貴大さんと妹さんはずいぶん前に別れたんですよね。
女　そうです。でも妹は貴大に未練があったんです。

神父が現れる。

神父　こんにちは。
男　こんにちは。
神父　今日はお早いですね。
男　はい。
神父　今からお聞きしましょうか。
男　それが今、この方と…込み入った話をしていまして…
女　こんにちは。
神父　お知り合いですか。
男　いえ、さっきここで出会いました。
女　わたしは初めてこの教会に来ました。
神父　それはきっと出会うべくして出会ったのでしょう。
男　つまり、神の御業ですか。
神父　そう思います。主はいつも、悩める人に運命の出会いを与え、大事なことを教えてくださいます。
男　運命の出会い。
神父　ええ、この世に主の意図の存在しない出会いは無いのですよ。わたしはしばらく奥の部屋で本を読んでいますので。どうぞごゆっくり。

神父、去る。

女　よろしかったですか。
男　いいんです。後で神父さまに聞いていただきますので。
女　なにか懺悔をするつもりだったんですか。
男　懺悔というか、話というか。ここに話に来るのは今日で三回目です。
女　三回目。
男　ええ、おかしいですよね。カトリック教徒ってわけでもないのに。
女　わたしもカトリック教徒じゃないのにカトリックの小学校に行ってましたから。

男　お祈りしてましたか。
女　ええ、毎日。朝の祈りは主の祈りです。
男　主の祈り。
女　「天にます　われらの父よ　願わくは」…
男　あ、聞いたことあります。
女　それからお昼を食べる前の感謝の祈り、食べた後の感謝の祈り、夕方の祈りは聖母マリアさまの祈りでした。もう体に染みついてます。毎日祈ってましたから。
男　どうしてカトリックの小学校に。
女　母がカトリックの方が品良く見えるからって。
男　確かにお嬢様、みたいなイメージありますね。
女　母は水商売やってたので、人一倍体裁を気にしてたみたいでした。洗礼も受けなさいって。
男　受けたんですか。
女　受けませんでした。
男　僕は受けようと思ってるんです。
女　そうなんですか。
男　ええ。今日、神父さまに話を聞いていただいたら、受けるつもりです。
女　わたしは、彼のことが気になり始めた。彼は一体どんなことを懺悔するためにここに来ているのだろうか。どんな罪悪感にさいなまれているのだろうか。それは、わたしの参考になることなのだろうか。参考になるなら知りたい。わたしはいつもその感覚を知りたいのだ。だって、罪悪感の分からないわたしに、妹を救うような証言が出来るのだろうか。
男　彼女は、俺のことが気になり始めた様子だった。俺が一体どんなことを懺悔するためにここに来ているのか。どんな罪悪感にさいなまれているのか。それは、わたしの参考になることなのだろうか。そう思っているように見受けられた。だが、俺は逆にこう思っていた。教えて欲しい。罪悪感はどうやったら無くなるのか。そしてどうやったら、彼女は俺の前から姿を消してくれるのか。

男の視線の先にシスターが現れる。

シスター　悔い改めなさい。
女　どうしました。
男　え？
女　ぼーっとして。

男　あ、いえ。ちょっと考えごとを。
女　よければ聞かせていただけませんか。
男　え？
女　水島さんのお話です。
男　俺は話そうかどうしようか迷った。俺には他人には見えないシスターが見えるということを伝えて、理解できるような話ではない。俺の話もまあまあ複雑な話だ。もう少し白井さんの話を聞いて、白井さんに罪悪感が無いのは何故なのかを知ってからでも遅くはない。俺はそう思った。
男　いいんです。僕の話は。
シスター　それでよいのですか。
男　ああ。
女　え？
男　あーっ。楽しみだな続きが。
女　そんなワクワクするような話ではないんですが。
男　そうですよね。ええと、貴大さんは妹さんに刺された。妹さんは貴大さんに未練があった。じゃあ、貴大さんは…？
女　それが…ちょっと理解できなくて。
男　理解できない。
女　…飲み屋での再会から1年半くらい経ったある日のことでした。わたしは貴大に呼び出されたんです。その時わたしは、例の不倫の真っ最中でした。
貴大　お前、不倫してるんだって。
美和　なんで知ってるの。
貴大　咲菜から聞いた。１４歳年上のおやじと不倫してるって。
美和　そうなんだ。
貴大　やめろよ。
美和　どうして。結構楽しいよ。
貴大　ふざけんなよ。
美和　ふざけてないよ。
貴大　それ俺たちへのアテツケか。
美和　え？どういうこと。
貴大　俺たちが結婚の話してるの知ってて、咲菜にわざわざそういうこと言ったのか。
美和　なんでそうなるの。
貴大　咲菜言ってたんだよ。結婚の話をしたらお姉ちゃんが不倫の話をしてきたって。

美和　ああ、それは咲菜が楽しそうに結婚の話をしてきたもんだから、わたしも不倫を楽しんでるんだって話しただけで。
貴大　それが咲菜を苦しめるのが分からないのか。
美和　どうして。
貴大　お前、最悪だな。
美和　わたし二人のこと応援してるんだよ。
貴大　やめろよ。
美和　え、どうして。
貴大　…気になってしょうがない。
美和　気になる？
貴大　…。
美和　ねえ、気になるってなにが？
貴大　…お前だよ。
美和　わたし？
貴大　俺はいつも思ってる。お前ともう一度やり直せないかって。
美和　わたしと。
貴大　不倫なんかやめて、俺と。
美和　え、だって貴大は咲菜と結婚するんでしょ。
貴大　それは咲菜を見てるとお前を思い出すからなんだよ。咲菜には悪いけど…。俺は結局、お前のことが気になってしょうがないんだ。お前から全然抜け出せてない。
美和　それが分かったんだ。
貴大　でもわたし今、不倫楽しんでるから。
美和　本当に？
貴大　本当だよ。
美和　嘘つくなよ。
貴大　ホントだって。だから咲菜と幸せになってね。
女　彼は納得できない様子で去っていきました。
男　つまり貴大さんは、あなたに未練があった。
女　信じられないんですが、そういう話でした。
男　あなたは貴大さんをもうなんとも思ってなかったんですか。
女　なんとも思ってませんでした。
男　でもそれから妹さんと貴大さんは別れた。
女　それから半年後のことです。
男　でそれから数年後、妹さんは貴大さんを刺した。
女　そうです。

男　白井さんは妹さんを救いたい。
女　もちろんです。そのためには法廷で心を打つような言葉が必要なんだと先生はおっしゃいました。
男　出来そうなんですか。
女　分かりません。何せわたしには罪悪感が無いものですから。
男　だから罪悪感を理解して、少しでもいい証言にしたい。
女　理解できたら心から話せると思うんです。
男　それで僕に話した。
女　はい。
男　何故僕に。
女　何故でしょうね。この教会だってあてずっぽうで選んだわけだし、偶然に賭けたのかもしれません。それと、教会にいらしたということは、あなたもなにか抱えてるのかも、と思ったのかもしれません。なんていうか、仲間みたいな。
男　仲間。
女　ええ。
男　それで話してみてどうなんですか。罪悪感は理解できそうですか。
女　できる気はしません。
男　でも今までカタチだけのごめんなさいでも相手を笑顔に出来たんですよね。
女　出来ました。
男　それなら、万が一理解できなかったとしてもやり通せるんじゃないですか。
女　…そうでしょうか。
男　練習しましょう。
シスター　あなたはそれでよいのですか。

男　シスターは時折そのように語りかけてきたが、今は目の前の白井さんだ。白井さんが明日の裁判で妹さんを救うことは、俺にとっても救いになるかもしれない。俺はいつしか白井さんの現状と俺自身とを重ね合わせていた。俺は白井さんの悩みに俺の願いを託していたのだ。

女　練習ですか。
男　ええ、裁判の練習です。
シスター　よいのですか。
男　うるさい！
女　え？
男　うるさいうるさーい！練習してみましょう。まずは思い切りカタチから入るんです。あなたはカタチで今までも乗り切ってきたんですから。

女　…分かりました。
男　じゃあ、事件のあらましを教えてください。

教会は、法廷に。

裁判官　それでは検察側、起訴状の朗読をお願いします。
検察官　公訴事実。被告人は、平成２９年２月１６日午後８時ごろ、名古屋市千種区本山１丁目３３番地の賃貸マンション、アーバンヴィラ本山３０６号室に、青山貴大さんを呼び出し、激しい口論の末、青山さんの右わき腹を刃渡り１１センチの果物ナイフで刺しました。罪状および罰条は、殺人未遂罪、刑法第２０３条にあたります。

男　殺人未遂なんですか。
女　検察側は、妹が口論の際に発した「死んで欲しい」という言葉から、妹には明らかな殺意があったと判断しているようでした。
男　妹さん、そんなこと言ったんですか。
女　「死んで欲しい」と言ったことは認めているようです。でも妹はその言葉は貴大に向けて言ったものではないと主張していました。

裁判官　被告人は終始黙っていることも、質問に答えないこともできます。質問に答えた時はそれが有利か不利かを問わず、証拠となることに注意してください。
咲菜　はい。
裁判官　検察官が読んだ事実に間違いはありますか。
咲菜　はい。確かにわたしは青山さんを刺しました。でも殺すつもりはありませんでした。
裁判官　弁護人のご意見はいかがですか。
先生　被告人の主張通り、被告人に殺意はありませんでした。従って弁護側は殺人未遂罪ではなく、刑法第２０４条、傷害罪の適用を主張します。
裁判官　検察官、冒頭陳述をどうぞ。
検察官　被告人は、平成２１年８月から平成２３年１１月までの２年３ヵ月、被害者である青山貴大さんと交際していました。二人は結婚を前提とした交際をしていましたが、次第に関係が悪化し、平成２３年１１月、青山さんの方から別れを切り出し、二人の関係は終わりました。しかし被告人は青山さんへの想いを断ち切ることが出来ず６年後の平成２９年２月１６日、つまり彼女の３０歳の誕生日に、姉の美和さんも自分の部屋に来る予定だからと言って青山さんをおびき出し、復縁を迫りました。しかし青山さんはそれに応じず、それどころか美和さんが来

ると騙されたことに激昂し、部屋を出ていこうとしました。そこで二人は激しい口論となり、その時被告人は「死んで欲しい」と口にしました。その後、被告人は自分のために作った誕生日ケーキのいちごを切っていた果物ナイフを持ち、青山さんが冷蔵庫のドアを開けて背中を向けた時に、右斜め後方から青山さんの右わき腹を刺しました。その後、偶然被告人の部屋を訪れた美和さんが警察に電話し、青山さんは病院に運ばれ、被告人は警察に自首しました。

男　貴大さんは、美和さんが来ると聞いたから、咲菜さんの部屋に行ったんですね。

女　そのようでした。

男　争点はあれですね、殺人未遂か、それとも傷害か。

女　検察側はあくまでも咲菜には殺意があったという主張でした。でも弁護側の意見は違いました。それは証人として呼ばれた咲菜の隣の部屋に住む虹村さんの証言の時にはっきりしました。

検察官　ということは、あなたは「死んで欲しい」という言葉をはっきり聞いたんですね。

隣人　はっきり聞きました。真冬だったんですが隣の部屋のベランダは何故か窓が開いていて、会話がクリアに聞こえて来たので間違いありません。あの方は彼に対して「死んで欲しい」と告げ、それから5分くらい経ってからでしょうか、男性のうめき声のようなものが聞こえたんです。

検察官　ありがとうございました。以上です。

裁判官　では弁護側、どうぞ。

先生　虹村さんが聞いたのは確かに「死んで欲しい」という言葉でしたか。

隣人　ええ、間違いありません。

先生　それは確かに青山さんに向かってかけられた言葉でしたか。

隣人　そう思います。その直前に二人は激しく言い合っている様子だったので。

先生　ということは、虹村さんは「死んで欲しい」という言葉が青山さんに向かって発せられたのを見たわけではない。

隣人　確かに見たわけではありませんが、あの部屋には二人しかいなかったんだから、確実でしょう。

先生　虹村さんが聞いたのは「死ね」でもなく「殺してやる」でもなく、「死んで欲しい」だったんですよね。

隣人　はい。はっきり「死んで欲しい」と聞こえました。

先生　しかしですよ。例えばその言葉はこういう時にもつかいませんか？「あの人ホントに嫌だ。もうマジ死んで欲しい！」

隣人　でもわたしが聞いたのはかなり昂ぶった様子で

先生　でもつかうのは認めますよね。その場にいない第三者に対しても。

隣人　それは…
先生　どうですか。
隣人　それはまぁ…認めます。
先生　終わります。

教会。

男　先生は、やり手ですね。
女　ええ、先生はとても頼りになっています。先生に任せておけば妹は絶対に救われる。そう思っています。そしてその先生が、わたしに証人になるのを依頼してきたんです。
男　あなたに。
女　先生は咲菜の「死んで欲しい」という言葉がわたしに対するものだとおっしゃいました。
男　でも白井さんはその場にいなかったんですよね。
女　いませんでした。でも二人の話題にはのぼっていた。先生は、事件当日、貴大が咲菜の前で、わたしのことをまだ好きだという話をしたのが原因だと言っていました。妹は、とても傷ついたと先生はおっしゃいました。
先生　美和さん、僕はね、妹さんのことが不憫でならない。分かるよね。妹さんは、美和さんの大事な家族だよね。だから分かって貰えると思うんだ。妹さんはあなたのようなお姉さんを持ったことで、小さい頃から苦労してきたんだ。だからわたしはあなたにつぐなって貰いたいと、そう思うんだよ。分かって貰えるよね。妹さんは傷ついてるんだよ。そして妹さんを傷つけたのはあなただ。分かるよね？金曜日の公判は、あなたの「つぐない」にかかってるんだ。つぐないの仕方は、美和さん自身が考えなきゃ。
女　先生は熱のこもった口調でそう言うと、わたしの肩を掴みました。
男　つぐないの仕方、というのはどういう意味なのでしょう。
女　わたしがどういうことを言うかにかかっているという意味でしょう。
男　どういうこともなにも言うことは決まってるんでしょう。
女　…ええ、決まっています。一応。
男　誰しも家族に対しては思わぬ行動をとるもんです。

男　その時俺は、初めて神父さまに話に来た時のことを思い出した。

教会。雨の音。

水島　…。

神父　（やってくる）こんばんは。

水島　こんばんは。

神父　電話で話を聞いて貰いたいとおっしゃっていた…

水島　はい、僕です。

神父　そうですか。あなたはカトリック教徒でありませんね。

水島　それだとまずいですか。

神父　問題ありません。神はどんな人にも等しく存在しています。

水島　ありがとうございます。

神父　奥の部屋に行きましょうか。

水島　告解室ではなく？

神父　実は告解室は教徒が使うものでして。あなたがもしよろしければ、今からの時間はおそらく誰も来ませんので、ここでも構いませんよ。

水島　では、ここで。

男　**俺にはやるべきことがあったが、それをやるためにはまず話をするべきだと思った。なんでもそうだ。まず話す。それから行動に移す。話も無く行動に移すのは良くない。**

神父　では、どうぞ。

水島　後悔していることがあります。

神父　それはどのようなことですか。

水島　妹のことです。

神父　妹さんですか。

水島　はい。数年前、妹はあることをやりたいと言ってきて、僕はそれに反対だったのですが、妹の熱意に負けて許してしまいました。ですがその結果、妹にとって最悪の事態を招いてしまったのです。

神父　つまりあなたが止めるべきだったと。

水島　止めるべきでした。

神父　どのようなことですか。

水島　妹が洗礼を受けてシスターになることです。

神父　それが何故まずいのでしょうか。

水島　妹は純粋な信仰心のもとに洗礼を受けたいと言ったわけではなかったのです。

神父　どういうことですか。

男　神父さまにそう聞かれた瞬間、俺は妹の聡香が「洗礼を受けたい」と言った時のことを思い出した。あれはもう5年前にもなるのか。

聡香　話があるんだ。
水島　なんだ改まって。
聡香　わたしが最近、日曜日にどこに行ってるか知ってるよね。
水島　ああ、教会だろ。ミサに出てるんだよな。
聡香　そう！もう最高なの！
水島　それは前にしつこいくらい聞いたよ。
聡香　それでね。わたしシスターになろうと思うんだ。
水島　シスター？
聡香　わたしもう１８だし、信仰を選択する権利ってあると思うんだよね。
水島　そんなの親父たちが許さないだろう。
聡香　それが、いいって。
水島　嘘だろ。
聡香　お前が本当に信仰したいと思ってるならいいんじゃないかって。一度幼稚園と小学校の時にカトリック系の学校に通わせた責任も親にはあるしって。
水島　甘いな親父たち。
聡香　お母さんは反対してたよ、でもマニアックな宗教にはまるよりは安心だって。
水島　俺は反対だ。
聡香　言うと思った。だからお兄ちゃんには最後に言おうと思ったんだよね。
水島　お前のことだ。どうせ純粋な気持ちじゃないに決まってる。
聡香　純粋だよ！わたし毎週ミサに出ているうちに分かったんだ。わたしの進むべき道はここだって。だからまず洗礼を受けて、その後、神学を勉強しながら修道院に住まわせて貰うんだ。
水島　お前はな、一度はまったら一切のものが見えなくなるんだ。あれだってそうだった。あのなんとかっていうバンドの時。わざわざ事務所の前で待ち伏せしたり、ボーカルのヤツが良く行くっていう飲み屋の前で待ってたり、それだけじゃなくて、
聡香　あれは確かにやりすぎだった。それは認める。でもホントに好きだったんだもん。でももう今は全然だし。
水島　そこだよ。洗礼を受けて勉強してシスターになるっていうのはバンドを追っかけるようなことじゃない。一生のことなんだ。分かってるのか。
聡香　分かってるって。
水島　ついこないだまで芸能事務所に勤めたいとか、自分もバンドやって有名になっ

ていつか共演して、恋に落ちて結婚するとか言ってた奴が、いきなり改心してシスターになろうだなんて、そんなの信じられるかよ。

聡香　信じてよ。わたし本気なんだよ。

水島　…。

聡香　お兄ちゃん！

水島　俺はその時の妹の様子を、言葉を選びながら慎重に神父さまに伝えた。

水島　僕は妹を止められませんでした。妹を止められるヤツはこの世にはいません。ひとつのことに熱中すると、その話で一日の全てが終わってしまうような、そんな人間でしたから。

神父　それで妹さんはシスターになった。

水島　ええ、あいつは夢を叶えました。でもやはりそれは失敗でした。きちんと止めるべきだったんです。これは俺の罪です。妹の性格を誰よりも分かっていたのに止められなかった。あいつがどうなるかだいたいの予測はついたのに。

神父　…かなりお疲れのようだ。無理せず少しずつお話になるほうがいいでしょう。

水島　少しずつ、ですか。

神父　ええ。そうだ、三回に分けましょう。

水島　僕は今日全てをお話しするつもりで…

神父　急いで話さなくてもいいことなら、きっちり丁寧に話しましょう。

水島　…分かりました。では三回に分けます。

神父　そうしましょう。

女　水島さん。どうしました。

男　いえ。裁判のことはだいたい分かりました。じゃあ練習してみましょうか。

飛影が入ってくる。

飛影　ああ、お姉さん。

女　飛影さん。

男　あ、この方が。

女　はい。半年前にわたしとセック

男　大丈夫です。言わなくても分かります。

飛影　ここにいるってさっき留守電に入ってたもんだから。いてもたってもいられなくて。

女　どうしたの。

飛影　俺、お姉さんにひとこと謝りたくて。
女　なにを。
飛影　俺、検察側の証人として、咲菜を悪く言っちゃったもんだから。
女　ああ。

再び法廷。

検察官　飛影さん、本名は熊田三吉さんですね。
飛影　はい。
検察官　あなたは半年前まで咲菜さんと付き合っていた。そうですよね。
飛影　はい、僕は白井咲菜さんと付き合っていました。
検察官　ホストとしてではなく真剣な交際でしたか。
飛影　はい、真面目に付き合っているつもりでした。
検察官　でも別れることになった。
飛影　はい、僕が他の女性とその…まあ色々ありまして、今年の1月にある決定的な原因がありまして、それで咲菜と口論になったんです。
検察官　で、あなたはその時に殴られた。
飛影　はい。
検察官　パーで。
飛影　いえ。
検察官　グーで。
飛影　はい。
検察官　殴った時の彼女はどんな様子でしたか。
飛影　とても怖い顔をしていました。
検察官　どんな顔でしたか。
飛影　上手く言えないんですけど、とにかく怖い顔でした。
検察官　つまり、人を殺しかねないような
先生　異議あり。検察官の質問は根拠のない推理に基づくものです。

教会。

男　その異議はどうなったんですか。
飛影　あんた誰。
男　水島です。その異議はどうなったんですか。
飛影　却下されたよ。だから俺のせいで、咲菜が怒ると何をするか分からない乱暴な女だって印象がついたと思うんだ。

女　いいんだよ。あなたはあなたの頼まれたことをしただけでしょ。
飛影　だけどなんか…悪くて。
女　羨ましいな。
飛影　羨ましい。
女　悪いって思えるのが。そういえばあの時ね、あなたの靴下までもがごめんって言ってるように見えたんだった。
飛影　ひとついいかな。
女　なに。
飛影　こんなこと教会で言うのどうかと思うんだけどさ。
男　ふさわしくない話なら言葉を選ぼうね。
飛影　俺とセックスした時
男　言葉は沢山あるのにどうしてそれを選ぶのかな。
飛影　泣いてたの覚えてる？
女　え？泣いてないよ。
飛影　やっぱり覚えてないんだ。
女　泣いてないよ！
飛影　…覚えてないならいいんだ。
男　泣いたっていうのはどういう風に。
飛影　水島さんはどういう関係の方ですか。
男　僕はその…祈り仲間です。
飛影　いや、そういう行為の最中に涙流してたから、よっぽど俺とのそれが良かったのかなって最初は思ったんだけど、全然別の所に心がありそうな気がしたからさ。
男　どこにありそうな気がしたんですか。
飛影　祈り仲間ぐいぐい来るね。
男　ぐいぐいすみません。
飛影　分からんけど俺は落ち込んだんだよね。あ、なんか他事考えてるって思って。
女　泣いてないよ。
飛影　そっか。まあいいや。お姉さん明日証言するんだよね。俺が言うのもなんだけど、頑張って。
女　ありがとう。
飛影　じゃ。（行こうとして）ここって出る時なんかやるんだっけ。神社みたいに。
男　十字を切ってください。
飛影　あー知ってる。（十字を切る）こんな感じ？俺こういうとこ初めて来たからさ。マジ凄いね。

教会の写真を撮る飛影。

飛影　じゃ。

飛影、去る。

女　泣いているはずがない。わたしに後悔はないのだから。わたしの記憶をたどると、わたしが最後に泣いたのは、父が他界した時だ。あの時に涙は枯れ果てた。そう記憶している。

男　泣いていたのだとしたら、それが彼女の罪悪感なのだとしたら、明日の証言には望みがあるのかもしれない。と同時にそれは、俺にとって残念なことなのかもしれない。何故なら俺は、罪悪感を無くす方法を探しているからだ。

女　練習しましょう。

男　じゃあ僕が弁護士さんの代わりに質問するので、それに答えてください。

女　分かりました。

男　って言っても、どんなこと質問するのかな。

女　あらかじめ質問されることは決まってます。一通り練習はしました。

女、男に紙を渡す。

男　…なるほど。じゃあまず、妹さんの性格について教えて貰えますか。

女　妹は、小さい頃から思いやりのある子でした。いつもわたしをかばってくれましたし、わたしの代わりに謝ってくれました。父が亡くなった後、わたしが全然しゃべらなくなって、クラスでわたしが浮いていた時も、妹がわたしのクラスの子ひとりひとりに、お姉ちゃんはお父さんが死んで辛いからこんな風なんだ。と一生懸命説明してくれました。わたしは妹に何度も助けられたんです。

男　そうですか。

男　俺の妹とは大違いだ。俺はそう思いながら、二度目に神父さまを訪れた時のことを思い出した。

神父　今日も雨ですね。

水島　僕、雨男で。

神父　わたしもです。

水島　…いつも夜遅くにすみません。

神父　いえいえ、ちょうど誰も来なくなる時間です。おかげさまでこうして神の御前であなたのお話を聞くことが出来る。

水島　ありがとうございます。

神父　さて前回は妹さんがシスターになったという所までお話をお聞きしました。

水島　…年が離れているせいか妹は僕をとても慕ってくれました。そのため僕は妹の性格を誰よりも分かっていました。両親よりもです。だから僕なら絶対に止められたはずなんです。

神父　でもやりたいことをやらせてあげたんでしょう。

水島　妹のやりたいことを応援する兄、はたから見れば素敵なことでしょう。でもあいつは違うんです。あいつは誰かが止めてやらないと絶対にダメなんです。

神父　…。

水島　妹は、純粋な信仰心からシスターになりたいと言ったわけではないと言いましたよね。

神父　ええ。

水島　妹はある時期から毎週欠かさずにミサに行くようになりました。それまで履いたことのなかった花柄のスカートを履いて薄化粧をして。僕は分かっていたんです。あいつが純粋にミサに出たくて行っているわけじゃない。あいつには会いたい人がいるんだと。

神父　会いたい人。

水島　妹は恋していたんです。

神父　ミサの出席者にですか。

水島　そうです。相手はミサの出席者でした。妹は彼のために洗礼を受けると決めたようでした。でもその事実が分かったのは数年後、妹がシスターになってからでした。

神父　はじまりは不純な動機でもいいのです。入口は常にひとつではありません。そこから神の道に進められたなら、それでいいじゃありませんか。

水島　僕も初めはそう思いました。でも妹は真面目な性格で、真面目すぎるくらい真面目で…、神の道を知れば知るほど、神の道を信じて進む方たちの想いを知れば知るほど、自分の心とのギャップに苦しんでいったんです。

神父　その結果、どうなったのですか。

水島　バランスを崩していきました。

神父　バランスを？

水島　罪悪感に飲みこまれていったんです。

神父　人を好きになることは悪いことではありませんよ。

水島　でも妹は、好きになってはいけない人を好きになったんです。

女　水島さん。他の質問をお願いします。
男　あなたは妹さんが人を殺すような人間だと思いますか。
女　思いません。
男　あなたは妹さんが自分のことを愛してくれていると思いますか。
女　思います。
男　それではあなたはどうですか。
女　わたしは…
男　あなた自身は愛にあふれた人間ですか。
女　わたしは…

女　わたしはまた、先生の熱のこもった様子を思い出していた。

先生　ダメだ！それでは勝てない！
美和・女　はい。
先生　迷うことなく答えるべきことを答えなくては！
美和・女　はい。
先生　いいですか。あなたはつぐなうんですよ！
美和・女　はい。
先生　つぐなわなきゃいけないんだ。そんなことではダメだ。
美和・女　先生は妹のどこが好きなんですか。
先生　その話は置いておきましょう。
美和・女　先生はいつから妹が好きなんですか。
先生　今は裁判の話です。
美和・女　先生は妹にわたしのことをどう聞いてるんですか。詳しく教えてください。
先生　美和さん！
美和・女　…。
先生　妹さんを救いましょう。僕とあなたで。

男　白井さん自身は愛にあふれた人間だと言えますか。
女　いえ、わたしは愛にあふれていません。
男　どうしてそう思うのですか。
女　…。
男　白井さん。
女　…何故なら、本当はわたしが貴大を刺したからです。
男　…え。
女　…わたしが、貴大を背後から刺しました。

男　それは本当ですか。
女　…本当です。妹は…わたしをかばっているんです。
男　どういうことですか。
女　わたしはあの夜、少し早めに着いていたんです。そして、あの鍵のかかっていなかった玄関のドアから話を聞いていたんです。
男　あの夜。
女　貴大を刺した夜です。

咲菜　どうして帰るの。
貴大　どうしてもなにも分かるだろう。
咲菜　居て欲しいって言ってるのに？
貴大　お前嘘ついたから。
咲菜　嘘ついたよ。じゃないと来なかったでしょ。
貴大　美和も来るんだと思ってた。

女　わたしは息をひそめて二人の会話を聞いていました。

咲菜　じゃないと来なかったでしょ。
貴大　なら帰るよ。
咲菜　お姉ちゃんが好きなの？
貴大　好きとかじゃない。
咲菜　じゃなんなの。
貴大　気になるんだよ。
咲菜　なんで。
貴大　あいつは表には出さないけど、凄い罪悪感を抱えて生きてるんだ。
咲菜　違うよ。お姉ちゃんには罪悪感なんてこれっぽっちもないんだよ。
貴大　あるんだよ。誰よりもあるんだ。だからああいう態度をとるんだよ。
咲菜　貴大も同じか。
貴大　え？
咲菜　みんなそう。お姉ちゃんのことばっかり。お姉ちゃんがほっとけない。お姉ちゃんが気になる。お姉ちゃんは本当は罪悪感に苦しんでいる。
貴大　咲菜だってそう思うだろう？
咲菜　思わない。わたしはお姉ちゃんの本性を知ってるから。
貴大　本性ってなんだよ。
咲菜　…。
貴大　咲菜。

咲菜　もう本当に嫌！死んで欲しい！

女　わたしは、妹は傷ついてる、妹を助けなければととっさに思いました。それでこっそりと部屋の中に入っていったんです。

貴大　そんなこと言うなよ。自分のお姉ちゃんに。

咲菜　…。

貴大　のどかわいた。お茶もらっていい？

女　そう言って貴大が冷蔵庫の右のドアを開けた瞬間に、斜め後ろから果物ナイフで貴大の右わき腹を刺したんです。貴大は崩れ落ち、わたしは怖くなって逃げました。その後、妹がナイフの指紋をふきとり、自分の指紋をつけて罪をかぶってくれたのでしょう。

男　…あなたがやったんですか。

女　ええそうです。わたしは明日この話をするつもりです。

男　…。

女　わたしは妹を救います。

雨の音。

水島　僕は妹を救ってやりたかったんです。でも出来なかった。

神父　出来なかったとは？

水島　それはまた次回に話してもいいですか。

神父　分かりました。そんなにご自分を責めないでください。

水島　…それは無理な話です。

神父　「父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる」マタイによる福音５章４５節。

水島　「汚れた者や、忌むべきこと及び偽りを行う者はその中にけっして入れない」ヨハネの黙示録２１章２７節。

神父　「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している」イザヤ書４３章第４節。

水島　「人の心はなによりも陰険で、それは直らない」エレミア書１７章９節。

神父　なるほど。あなたの心は深い闇に閉ざされているようですね。

水島　…。

神父　それにしても聖書をよく勉強されている。

水島　妹のことがあってから聖書を読み続けました。

神父　善いことです。神はいつもなにかしらのヒントをくださいます。
水島　いえ、ヒントが貰えなかったから今ここに来ているんです。
神父　いえ、それは神がここに来なさいというヒントを与えてくれたということなのですよ。
水島　ここに来なさい、と。
神父　そうです。あなたがここに来ることは神のお導きだったのです。
水島　…次回で最後にします。
神父　次回、お待ちしています。

女　水島さん。
男　…。
女　水島さん。
男　僕も妹を救いたかった！でも救えなかったんだ。
女　救えなかった。
男　僕の妹は死んだんです。
女　どうして。
男　不慮の事故でした。でも、ただの事故じゃない。僕のせいです。
シスター　それでよいのですか。
男　僕が止められなかったせいなんです。
シスター　それでよいのですか。
男　だから僕は…

鞄から包丁を取り出す男。

男　あの男を殺さなきゃいけない。
女　あの男。
男　神父さまですよ。

聡香　お兄ちゃん。
水島　久しぶりだな。元気にやってるか。
聡香　…。
水島　どうした。
聡香　応えられないって。
水島　…え？
聡香　気持ちには応えられないって。
水島　なんの話だよ。

聡香　…「あなたの気持ちには応えられません。わたしは神と生きると決めたのです。シスター、あなたにはがっかりしました。あなたは肉体の結婚を捨て、神と精神としての結婚をしたのでしょう。それならば、絶対にそのようなことを言ってはいけない。いいですか、二度と言わないでください。二度と」。

水島　神父さま。

聡香　…。

水島　お前、神父さまが…

聡香　わたしも必死に勉強して経験を積んできた。だからこうなることは分かってた。でもどんなに沢山考えても諦められなかったんだ。自分の気持ちを伝えずに生き続けるなんて、わたしにはできなかった。

水島　…。

聡香　…失望された。

水島　そんなことないだろう。

聡香　あの人の目、凄く冷たかった。裏切り者を見る目だった。

水島　神は間違った者に対しても寛容なんだろう。

聡香　神じゃない。あの人は人間。

水島　…。

聡香　言わなきゃよかった。違う、その前にこの気持ちを捨てなきゃいけなかった。

水島　…お前、大丈夫か。

聡香　もう戻れない。

水島　…そんなことないだろう。

聡香　ううん、もう戻れない。

水島　…。

聡香　もう、ぜんぶ変わっちゃったんだ。

水島　…。

聡香　一度言ったことは、取り返しがつかないんだよ。お兄ちゃん。

女　一度言ったことは…取り返しがつかない。

男　そこでもっと引き止めて話を聞いてやれば良かったのかもしれません。だけど俺は引き止めなかった。妹はひとつのことに囚われると、それで頭が支配されてしまうような、そんな人間だって分かってたのに。…その夜、妹はふらふらと暗い山道を歩いていたようです。妹は切り立った崖から足を踏み外した。妹の向かう先には大きな聖堂がありました。祈るつもりだったのかもしれませんし、本当のことは分かりません。

女　…。

男　あいつはどんづまりだったんです。

女　…。

男　僕だけは分かっていたんだ。あいつがどんづまりになるかもしれない人間だって。だから僕が他にのめりこめるものを見つけてあげれば良かったんだ。後悔してもしきれませんし、罪悪感は無くなることはありません。

女　…だから神父さまを。

男　あの人はなにも感じていないんです。当然です。あの人は知らないんですから。妹が何故死んだのかを。ただの事故だと思っている。関係ないと思ってる。だけど俺は納得できないんだ。全然納得できないんだ。

女　…。

男　白井さんは立派につぐなってください。妹さんを救ってください。

女　あなたのやろうとしていることを知った以上は、見過ごせません。

男　僕は罪悪感を無くしたいんだ。

女　そこまでして無くしたいんですか。

男　無くしたい。

風の音。

別の男の声　どうしましたか。

聖歌が流れる。

女　その瞬間、わたしの中でなにかがはがれて垂れ下がり、ぶらぶらと揺れたのを感じた。わたしは彼の話を聞きながら、自分にどうして罪悪感がないのにもう少しで気づけそうな気がしていた。しかしそれは、同時に危険なことのように感じて、わたしはこれ以上、わたしの中のなにかがはがれ落ちるのを恐れていた。

風の音。

別の男の声　どうしましたか。

男　どうしました。

女　…。

男　ありがとうございます。

女　…。

男　あなたがわたしに本当のことを話してくれたから、行動を実行に移す踏ん切りがついた。

女　…。

男　白井さん。

聖歌が流れ続けている。

別の男の声　どうしましたか。

男　どうしましたか。

女　その瞬間、彼がわたしの肩に手を置いた瞬間、またあの懐かしい香りがふわっと漂い、わたしの中のなにかは…とうとう、完全にはがれてしまった。

びゅうっと、ひときわ大きな風の音。

女　…ごめんなさい。

男　え？

女　ごめんなさい…ごめんなさいごめんなさい。

男　どうしたんです。白井さん。

女　ごめんなさい。許してください。

男　どうしたんです。

女　……思い出しました。

男　…なにを。

女　わたしはあなたに本当のことなんて話していませんでした。

男　え。どういうことですか。

女　とてもひどいことをしたんです。

男　…。

女　わたしは罪悪感を押し殺したんです。

男　押し殺したっていうのは。

女　あるひとつの罪悪感を忘れるために、その他すべての罪悪感を押し殺したんです。それを今、思い出しました。

男　…どういうことですか。

女　小学４年生の時、父と母が離婚することになりまして、理由ははっきりとは分かりませんでしたが、女がどうこう、そっちにも男がどうこうと話していたのが聞こえたので、あれはそういう問題だったのでしょう。それである時、父と二人きりになり、聞かれたんです。

父の声　なぁ美和。どっちについて行きたい？

女　お父さんについて行きたい。

父の声　咲菜はどっちだと思う？

女　そう聞かれ、わたしは父について行きたかったので、こう答えたんです。

女　咲菜はお母さんって言ってた。

父の声　そうか。

女　父はしばらく考え込みました。わたしはその時、今なら言い直せる、咲菜はそんなこと言ってなかったって言い直せる、そう思いました。でも幼いわたしは言い直せませんでした。咲菜も行きたいと言ったらきっと咲菜の方が優先される。だってあの子は妹だし、わたしはお姉ちゃんだから。そう思ったんです。

父の声　じゃあ美和、一緒に行こうか。

女　うん。

女　父はそう言うと、わたしをぎゅっと抱きしめました。父の肩から嗅ぎ慣れたタバコの香りがふわっと漂いました。その匂いは独特でしたが、わたしは嫌いではありませんでした。

男　それで…あなたがお父さんについていった。

女　はい。でもそれから1年経ち、父は突然倒れ、そしてそのまま死んでしまいました。あっという間のことでした。わたしはまた母のもとに帰ることになりました。わたしはその後、教会に懺悔しに行きました。

男　この教会に。

女　そうです。自分が通っていたカトリックの小学校にある教会では、友だちに懺悔しているのがばれるかもしれないと思い、わたしはあちこち歩き回ってこの教会を見つけたんです。…風の強い日でした。わたしが教会のドアを開けた瞬間、外からの風が吹き込んで、ライトがゆらゆらと揺れたのを覚えています。

教会のドアが開き、びゅうっと、風が吹き込む。

聖歌が流れる。

老神父の声　どうしましたか。

女　年老いた神父さまの声が優しく響きました。全て言ってごらんなさい、と神父さまは言いました。わたしは自分の罪悪感を全て吐き出しました。すると神父さまはこうおっしゃいました。

老神父の声　よく話してくれましたね。あとは自分から相手に正直に言うことです。それが

解決の道です。
女　わかりました。そう答えてわたしはその足でまっすぐ妹の所に行きました。ですがわたしが言おうとした瞬間、先に妹がこう言いました。

咲菜　わたし知ってる。
女　え？
咲菜　お姉ちゃんがやったこと。
女　…。
咲菜　謝らないで。謝ったってもう、お父さんは戻ってこない。
女　でも
咲菜　うるさい。
女　…。
咲菜　わたしがお父さんと行くはずだったんだよ。
女　…。
咲菜　わたしが行くはずだったんだ。

女　咲菜の目にはわたしに対する軽蔑の色がはっきりと見えました。そこでわたしはまた、さらに自分から「ごめん」と言えたら良かったのかもしれません。謝らないでと言われても、なんと言われても、自分の言葉で自分の気持ちをちゃんと伝えられれば良かったのかもしれません。でもわたしはタイミングを逃しました。そして、妹はこうも言いました。

咲菜　これから、もう絶対にそのこと話さないで。

女　そこからわたしはわたしを押し殺したんです。あまりに強く押し殺したために、わたしは一切のことを忘れました。
あの時、あの授業の時、懺悔の青い紙に書こうとしたとき、わたし完璧に忘れていたんです。それと引き換えに、わたしは罪悪感の無いわたしに生まれ変わりました。

女、青い紙を「美和」に渡す。
青い紙に文字を書いた「美和」、紺野先生に提出する。

男　何故、罪悪感の無いあなたになったのですか。
女　そうしなければ妹の望むことに答えられなかったからです。
男　じゃああなたは、そこからずっと妹さんに対するつぐないをしているのですか。

女　…そうです。
男　…じゃあ、万引きも？

貴大　で、どうしてあんなことしたの。
美和　…欲しかったから。
貴大　違うだろう。それだけじゃないだろう。
美和　…ううん、それだけなの。欲しかったの。
貴大　どうして欲しかったの。
美和　……もうすぐ貴大の誕生日でしょ。おしゃれしたくて。

女　本当は咲菜にあげようと思ったんです。
男　妹さんに。
女　咲菜が欲しいと前から言っていて。全部買おうと思ったら結構な額で。
男　罪悪感があると盗むことができない。だから罪悪感を押し殺した。
女　…はい。
男　飛影さんとのことは？

咲菜　お姉ちゃん、ちょっと聞いてくれる？
美和　なに？
咲菜　わたし貴大とヨリ戻せそうなんだよね。
美和　え、そうなんだ。
咲菜　最近また連絡とってててさ、貴大けっこう優しいんだよね。これは戻れそうかなあと思って。だから飛影くんとはもうおしまいにしようと思って。
美和　飛影くんのこと好きじゃなかったの？
咲菜　そりゃ好きだよ。でも貴大のほうがずっと好きだし。お姉ちゃんもわたしと貴大が付き合うほうがいいでしょ？だって前にさ、二人の幸せ祈ってるって言ってくれたもんね。だから悪いんだけど、飛影くんとホテル行ってくれない？
美和　え？
咲菜　飛影くん、ああ見えて凄くナイーブだから、わたしのお姉ちゃんと寝ちゃったって思ったら、わたしと付き合ってらんないと思うんだよね。
美和　…。
咲菜　あ、やだ。真に受けた？
美和　…え？
咲菜　ごめん、冗談冗談！

男　それで寝たんですか。

女　はい。
男　…。
女　実際、そういうことになってから、わたしが咲菜の姉だと知った飛影くんはとんでもない罪悪感にさいなまれ、妹のもとを去りました。

美和　咲菜。ちょっと聞いて欲しいことがあって。
咲菜　なに。おねえちゃん。
美和　咲菜の彼氏いるじゃん。
咲菜　ああ、飛影くん。
美和　わたし、彼とセックスしたんだ。
咲菜　…は？
美和　昨日ホテル行ってさ。
咲菜　は？冗談でしょ。
美和　ホントだよ。これ。（靴下を見せる）昨日、彼が忘れてった。
咲菜　…なんで。
美和　…咲菜のためにだよ。

咲菜、美和の頬を打つ。

咲菜　最低。

咲菜が走り去る。
ちょっとして、美和が追いかける。
美和が追いつくと、咲菜は電話をかけている。

咲菜　（泣きながら）あ、貴大？…ちょっと聞いて欲しいことがあって…え？うん、大丈夫、ちょっとショックで…気が動転してるだけ…うん、大丈夫、ありがとう…

その様子を離れたところから見ている美和。

男　もしかして不倫も？

咲菜　なんかさ、飲み屋で再会してから、貴大がやたらお姉ちゃんのこと話すんだよね。
美和　そうなんだ。
咲菜　お姉ちゃんっていい人いないんだっけ。
美和　うん、貴大と別れてから、誰ともまともに付き合ってない。

咲菜　なんかそれって勿体ないよね。この際不倫とかしちゃえば。
美和　不倫。
咲菜　貴大もそんな女だって知ったらお姉ちゃんのこと言わない気がするんだよね。
美和　…そうかな。
咲菜　いや、だけどお姉ちゃんに不倫なんかできるわけないか！（笑う）

男　あなたはもう十分つぐなったでしょう。
女　いいえ、わたしはまだつぐなえてません。父はもう帰ってこないからです。わたしは父との最後の時間を、咲菜を出し抜いて横取りした。
男　だけどそれはもうずいぶん前のことですよね。
女　水島さんは過去のことだからと言って忘れられますか？
男　…。
女　どんなに年月が過ぎようと過去の出来事が現在を作っていることに変わりはないんです。
男　…お母さんはどうされてるんですか。
女　少し離れた町で、一人で暮らしてます。わたしも咲菜も社会人になってからは家を出てしまって。
男　そうですか。
女　たまに付き合っている男性の話を聞きますけど、長く続かないみたいです。それから、忘れた頃にメールが来ます。「元気にしてる？ごめんね」って。
男　ごめんね。
女　ええ。
男　…白井さん。あなた本当はやってないんでしょう。
女　…。
男　貴大さんを刺してはいないんだ。
女　…。
男　そうなんですよね。

女　わたしは、妹に面会に行った時のことを思い出していた。

咲菜　来てくれてありがとう。
美和　うん。
咲菜　…ねえ。あの時、ずっと玄関にいたよね。
美和　ああ、だってあの日は咲菜に8時に来てねって言われてたでしょ。それで行ったらドアが開いてて。
咲菜　そうだよね、お姉ちゃんもいたもんね。あの場に。

美和　…。
咲菜　貴大、後ろ向いてたからさ。
美和　どういうこと？
咲菜　分かるよね。
美和　…。
咲菜　来てくれてありがとう。「証言」、楽しみにしてる。

女　わたしはつぐなわなきゃいけないんです。
男　もう十分でしょう。
女　いえ、先生もそれを望んでいるんです。
男　まさか。
女　先生は咲菜のことを愛しています。だから咲菜を救いたいんです。
男　でも弁護士がそんなことすすめますか。
女　もちろん直接言われたわけじゃありません。でもそう感じるんです。お前が身代わりになれと。わたし、先生に失望されたくないんです。
男　どうして。
女　先生が好きだからです。
男　いつから。
女　不倫のことで少しもめて…というのも、不倫相手の方が奥さんにばれるようなことをやったのが原因で、奥さんはわたしの方に怒ってしまってわたしを訴えるというので、わたしは先生の事務所を訪れたんです。

先生　大丈夫ですよ。任せてください。
美和　うまく行きますか。
先生　うまく行きます！この手のケースはとにかくどうやって奥さんの怒りをしずめるかが大事なんです。向こうは怒りのはけ口をあなたにしようとしている。でもあなたより責めを負うべき人間は、もう一人いるんです。それをきちんと奥さんに理解して貰うように仕向ける。これがコツですよ。裁判まで行くと厄介ですので、その前になんとかなるようこっちで上手いこと話をつけましょう。
美和　ありがとうございます。
先生　大丈夫。なにも心配しないで！

女　先生はとても頼りになりました。それまで味方のいない人生だと思っていたわたしは、たとえ仕事とはいえ、わたしに対してとても親身になってくださる先生に、強い好意が芽生えるのを感じました。誰か頼る相手が欲しかったのかもしれません。

男　でも先生は妹さんのことを好きになってしまった。
女　妹は弁護士を選ぶ時に真っ先に先生の名前を挙げました。
男　ちょっと待ってください。妹さんはあなたの気持ちを分かっていて…
女　分かっていたとしても、先生が妹を好きになるのを止める理由はありません。先生は、どこか父に似ていました。わたしにも咲菜にもそれが分かっていました。
男　あなたはそれでいいんですか。
女　いいんです。
男　そのうえ妹さんの罪をかぶるなんて。
女　わたしはあの夜、そのために早めに呼び出されたんだと思っています。
男　あの夜。
女　貴大が刺された夜です。

咲菜　どうして帰るの。
貴大　どうしてもなにも分かるだろう。
咲菜　居て欲しいって言ってるのに？
貴大　お前嘘ついたから。
咲菜　嘘ついたよ。じゃないと来なかったでしょ。
貴大　美和も来るんだと思ってた。

女　わたしは息をひそめて二人の会話を聞いていました。

咲菜　じゃないと来なかったでしょ。
貴大　なら帰るよ。
咲菜　お姉ちゃんが好きなの？
貴大　好きとかじゃない。
咲菜　じゃなんなの。
貴大　気になるんだよ。
咲菜　なんで。
貴大　あいつは表には出さないけど、凄い罪悪感を抱えて生きてるんだ。
咲菜　違うよ。お姉ちゃんには罪悪感なんてこれっぽっちもないんだよ。
貴大　あるんだよ。誰よりもあるんだ。だからああいう態度をとるんだよ。
咲菜　貴大も同じか。
貴大　え？
咲菜　みんなそう。お姉ちゃんのことばっかり。お姉ちゃんがほっとけない。お姉ちゃんが気になる。お姉ちゃんは本当は罪悪感に苦しんでいる。
貴大　咲菜だってそう思うだろう？

咲菜　思わない。わたしはお姉ちゃんの本性を知ってるから。
貴大　本性ってなんだよ。
咲菜　…。
貴大　咲菜。
咲菜　もう本当に嫌！死んで欲しい！

女　それからしばらくして彼のうめき声が聞こえました。わたしは急いで中に駆け込みました。血まみれのナイフを握った咲菜と、冷蔵庫の前で倒れている貴大がいました。思わず声をあげそうになるわたしを見て、咲菜は静かにと口の前に人差し指を立てました。そうして別室に行くように促しました。

美和　…咲菜。
咲菜　…声出さないで。上手く行かなくなるから。
美和　（頷く）
咲菜　あとね、お姉ちゃんは少し後から来たことにしよう。
美和　え…
咲菜　そうして。

男　それって、あなたがその場にいたことが後で分かった時に不利になるように…
女　もしそうだとしても、わたしはそれを飲みこみます。
男　そんな…ダメですよ。
女　あなたと初めにすれ違った時、あなたからふわっと父のタバコの香りがしたとき、わたし思いました。ああ、この人に話そう。
男　…。
女　この教会に来て良かったと思いました。あなたはわたしを救ってくれたんです。
男　救ってないでしょう。あなたが罪をかぶってしまったら。
女　いいえ、この世界の中で、誰一人なにも知らないなかで、あなただけがわたしの話を聞いて知ってくれた。わたしは、自分に罪悪感が無い理由を思い出した。
男　…。
女　これで心置きなく明日を迎えることが出来ます。
男　違うでしょう！
女　そうです。
男　違うでしょう。だって俺も違うんだから。
女　俺も？
男　俺も違うんだ、違うのにそうだと思おうとしている。分かってるんだ。本当はどうにもならないって。どうやったって妹は戻ってこないんだって。

女　水島さん。
男　あなただって分かってるはずだ！
女　いいえ、わたしは間違ってません。先生もつぐないなさいと言っていました！わたしはつぐなうんです。つぐなわなきゃいけないんです。
男　先生はそんな方法でつぐないをしろとは言っていないでしょう。
女　先生はわたしにつぐなえと
男　どうつぐなえと言ったんですか。
女　どうって。
男　あなたは自分を正当化するために、事実を捻じ曲げているんだ！

先生　ダメだ！それでは勝てない！
女　はい。
先生　迷うことなく答えるべきことを答えなくては！
女　はい。
先生　いいですか。あなたはつぐなうんですよ！
女　はい。
先生　つぐなわなきゃいけないんだ。そんなことではダメだ。
女　先生は妹のどこが好きなんですか。
先生　その話は置いておきましょう。
女　先生はいつから妹が好きなんですか。
先生　今は裁判の話です。
女　先生は妹にわたしのことをどう聞いてるんですか。詳しく教えてください。
先生　美和さん！
女　…。
先生　妹さんを救いましょう。僕とあなたで。
女　どうやって救うんですか。
先生　…実はね、僕は、本当のところ、あなたの罪悪感の無さが妹さんを苦しめてきたわけじゃないと思っているんだ。
女　…。
先生　妹さんと接するうちに分かってきたんだ。妹さんには小さい頃に受けた心の傷がある。そしてそれはあなたにも。そうでしょう？
女　…。
先生　いくら聞いても彼女は詳しく話してくれない、しかしあなたは知ってるはずだ。
女　どうしてそう思うんですか。
先生　妹さんの発言にはあなたに対する強いコンプレックスを感じるからだ。そして僕はそういうひねくれた女性が、大好きだ。

女　…。
先生　だから金曜日は正直に話して欲しい。話すことで妹さんが何故今回の事件を起こしてしまったのかを理解して貰えるように。
女　…。
先生　美和さん。正直になりましょう。
女　…。
男　分かっているはずだ。
女　わたしはね、父と幸せな1年を過ごしたんです。そしてその間まったく後悔しなかった。後悔してたのかもしれないけど、それを忘れるほど幸せな1年を過ごせた。だからつぐなうのは、わたしが罪をかぶるのは当然なんです。咲菜に選択肢を与えなかった自分を罰するのは当然なんです。

貴大が来る。

女　…貴大。どうして。
貴大　飛影さんに聞いた。
女　飛影くんと知り合いだっけ。
貴大　いやたいして知り合いじゃないんだけど、こないだの公判の後、ライン交換しましょうって言われたから。
女　そうなんだ。

貴大と男、目が合う。

貴大　祈り仲間の方。
男　あ、ラインで。
貴大　はい。写真が来まして（見せる）
男　「ぐいぐい来る祈り仲間」。
女　どうして来たの。
貴大　お前がバカなことしないように忠告しに来たんだよ。
女　なに、バカなことって。
貴大　お前、俺を刺したって言おうとしてるだろう。
女　え。
貴大　お前のことだから、そういうことするつもりだろうと思って。
女　なんで分かるの。
貴大　どれだけお前を見てきたと思ってんだよ。

女　…。
貴大　俺を刺したのは咲菜だ。それは俺が一番よく分かってるから。
女　…でも。
貴大　もういいよ。
女　…。
貴大　ずっと妹の顔色うかがってきたんだろう。
女　…なんで分かるの。
貴大　分かるよ。俺はずっとお前見て来たんだから。
女　…ごめんなさい。
貴大　…それホントっぽいな。
女　…え。
貴大　その「ごめんなさい」。
女　…。
貴大　じゃ、明日な。

貴大、去る。

女　なんで。
男　…。
女　なんで構うの。
男　…。
女　咲菜と幸せになって欲しかったのに。
男　あなたがお父さんを取ったから？
女　…。
男　人の気持ちはそう簡単なもんじゃないです。
女　…。
男　あなたはやり直せる。あなたの妹さんも。
女　水島さんはどうするんですか。
男　僕は…今からやるべきことをやります。

男、奥の部屋に去っていく。
女、男の去った方に行こうとする。
が、神父と男が一緒に現れる。

神父　お話は終わりましたか。
男　はい。

神父　もうすっかり夜になりましたね。
男　はい。
神父　さて、三度目のお話をお聞きしましょうか。
男　…。
神父　どうしました。
男　やろうと思っていることがありました。
神父　やろうと思っていること。
男　でも思ったんです。罪悪感は永遠に消えない。
神父　…。
男　罪悪感を消そうと別のことをしても、また別の罪悪感が浮かび、それは永遠に回り続ける。
神父　…そうかもしれませんね。
男　…はい。
神父　わたしもひとつ大きな罪悪感を抱えていてね。
男　…。
神父　大事な仲間を救えなかった。
男　…。
神父　わたしは彼女の自分への気持ちに気づいていたのに、それを見ないふりをしたんです。
男　…。
神父　ちゃんと話し合えば良かったんだ。
男　…。
神父　だからこの後どうなっても、それはわたしへの報いだと思っています。
男　…。
神父　だから大丈夫です。
男　…。
神父　ご遠慮なく。

男、カバンに手をやる。
包丁を取り出す男。

男　料理人目指してまして。
神父　料理人？
男　ええ、それで…
神父　それで？
男　こいつの切れ味が悪いんで、この近くの金物屋に行こうと思ってたんです。それ

をこの方に相談してたんですけど、すっかり夜になっちゃったんで。
神父　ああ、あそこは１８時までですからね。
男　妹も好きなことをやってたんで、僕も好きなことやろうと思うんですよ。
神父　なるほど。
男　話は以上です。
神父　…そうですか。
男　…はい。
神父　あなたに神のご加護がありますように。

神父、奥の部屋に去る。

男　そういえば妹に付き合って一度だけ日曜のミサに来たんですよ。
女　ミサに。
男　はじめはそんなもん、って思ってたけど、心が洗われるような気がしましたね。
女　あれは。
男　わたしも好きでした。学校のミサ。
女　ミサって歌うたうでしょう。
男　ああ、聖歌ですね。
女　あれがまた良くてね。
男　いいですね。
女　歌ってる妹の顔ばっかり見てました。あまりに楽しそうで。
男　歌いましょうか。
女　いや分かんないですから。
男　（聖歌集をめくり）どれなら知ってますか。
女　…うーん。あ。
男　なんですか。
女　これ。妹がよく歌ってた。
男　ああ、有名ですよね。違う歌詞で結婚式でも歌われてたり。
女　歌えるかな。
男　歌いましょう。

聖歌が流れる。
二人、歌う。
キャンドルが灯り、ミサが始まったような、終わったような。
そして、聖歌が途切れる。

わたしは明日の裁判について考えていた。先生がどう思うかは分からない。ただ、わたしはわたしの思った通りにつぐなってみよう。今は、そう思っている。

（完）